国会仮議事堂の図面の変遷史

—わが国の国会仮議事堂に関する研究

ON THE HISTORY OF CHANGES IN THE PLANS OF THE PROVISIONAL DIET BUILDING

—A study on the provisional Diet Building in Japan

堀内 正 昭*

Masaaki HORIUCHI

The purpose of this paper is to clarify all the processes of plans from the first design (European style), the second one (semi-European style) of the Diet Building until the building was finished as a temporary construction, the plan of which was discovered in 2004 in Chiba. The first plan of the Diet Building was designed by Paul Köhler, who worked at the architectural firm Ende & Böckmann in Berlin; the provisional Diet Building was completed by Adolf Stegmüller at the same firm and Shigenori Yoshii. Though the scale of the provisional Diet Building was reduced sharply and the construction was changed to wood from brick, with regard to the room arrangement both of the plans were very similar; accordingly, the idea of the first plan designed by Köhler, who had to retire because of his illness before completion, still existed.

Keywords: Ende, Böckmann, Diet Building, Stegmüller, Köhler, Meiji

エンデ, ベックマン, 国会議事堂, シュテークミュラー, ケーラー, 明治

はじめに

国会仮議事堂は、第1回帝国議会開催のために1890（明治23）年11月24日に竣工したが、建物はその後2ヶ月足らずの翌91年1月20日に焼失してしまった¹⁾。大熊喜邦は「本議事堂の図面や展望図を初め、諸官衙の絵画は内務、大蔵両省に永らく保存されていたが、先年の大震災で焼亡したのは明治建築資料として惜い事であった」²⁾と回顧している。そのため、これまで仮議事堂については十分な研究がなされてこなかった。ところが最近になって、仮議事堂の図面（平面図）が発見された³⁾。それは、この初代国会仮議事堂の原図であった。

そもそも国会議事堂の原案は、ベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所（以下略す場合はエンデ&ベックマンとする）の設計案に遡り、和洋折衷案を経て、さらに煉瓦造から木造に構造を変更して仮議事堂案が作られるという経過をたどる⁴⁾。大熊喜邦は、「第1回建築の仮議事堂の平面を見ると、真中が皇室用の部分及共通の部分、左が貴族院右が衆議院と云う風な平面構成になって居る。而してエンデ&ベックマンがやりました本議事堂の間取も亦大体斯う云う風な平面構成になって居る」⁵⁾と、実際に仮議事堂案を見た者の視線で仮議事堂の位置付けを行っている。しかし、そこには原案から仮議事堂に至る複雑な図面の変遷の過程が省かれている。

そこで本稿では、今回発見された仮議事堂の図面ならびにこれまで不詳であったドイツ側の設計担当者について判明したことを紹介するとともに、当時の新聞に記載された図面と記事を駆使して、エンデ&ベックマンによる原案から仮議事堂の建設に至るまでの全過程を明らかにする。

1. 国会議事堂原案

国会議事堂の原案は、1886（明治19）年4月に来日したヴィルヘルム・ベックマンが構想を練り、同年8月の帰国後にベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所で作成された。翌1887年5月に、その原案の印刷図面をヘルマン・エンデが持参して来日した。設計担当者は所員のパウル・ケーラー（Paul Köhler）であったが、日本では名前のみが知られているに過ぎない。

1) パウル・ケーラーについて

まず、ドイチェ・パウツァイトゥンク（＝ドイツ建築新聞という意味）に掲載されたケーラーの計報記事を紹介する。

「1888年2月7日、建築家パウル・ケーラーはアルコで死去した。彼は、1862年からベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所で働き続けた。同事務所は、一人の芸術的才能に恵まれた所員を失うことになる。」⁶⁾

* 昭和女子大学短期大学部文化創造学科 教授・工博

Prof., Dept. of Culture and Creative Arts, Showa Women's University (Junior College), Dr. Eng.

エンデ&ベックマン建築事務所は1860年に開設されているので、ケーラーは最古参の所員の一人となる。なお、文中のアルコ（Arco）とは南チロルの都市で、冬期の温和な気候のせいで訪れる人の多い保養地であったという⁷⁾。

さらにドイチェ・パウツァイトゥンクからケーラーの名を拾うと、「ベルリンのエンデ&ベックマン建築事務所の拡張」と題する記事にそれが見出せる。以下にその内容を訳出する。

「信頼できる所員であるパウル・ケーラー、アドルフ・ハルトゥンク、そしてエドガー・ギーゼンブルクをエンデ&ベックマンのアトリエの共同出資者として扱い、事務所のために彼ら3名によってとくになされた図面には、彼らの名を記すことにする。」⁸⁾

事実、日本の国会議事堂案の図面にはエンデ&ベックマンに続いてケーラーの名が記されている。

一所員として働いたケーラーの単独の業績を特定するのは困難であるが、確実にケーラーの仕事であったとみなせる作品に、チェコのブルノに建てられたドイチェス・ハウス協会会館がある⁹⁾。ドイチェス・ハウス協会はチェコのモラヴィアを開拓したドイツ人のために設立され、同会館は1887年4月に設計競技の告知がなされた。同年の秋に入選作の発表があり、翌1888年3月、ドイチェ・パウツァイトゥンクに1等入選案の図面が掲載されている（図1）。

建物の完成は1891年5月で、同年6月25日付のドイチェ・パウツァイトゥンクに竣工した建物の外観の写真と平面図を見ることが出来る。その図面にはエンデ&ベックマン、P. ケーラーと記されているので、設計担当者がケーラーであったことがわかる。

同協会の建物は現存しないが、外観のコーニス、隅石、窓枠などの要所に砂岩を、壁面に化粧煉瓦を用い、強い傾斜屋根、装飾を施した切妻破風、尖塔をもつドイツルネサンスのリバイバル様式で設計された。

ケーラーは1888年2月に死去しているので、同会館の完成を見届けられなかったが、入選の報を知って永眠したのはせめてもの幸いであったといえよう。

図1 ドイチェス・ハウス協会会館（1888-1891）

2) 国会議事堂原案

国会議事堂の原案（図2）を見ると、中央に吹き抜けの玄関ホールがあり、その上にドームが立ち上がる。正面右手に上院、左手に下院を配して、それら両院を大きなホールが結び付けている。両院の正面側にはそれぞれ1階に食堂・喫茶室、2階に会議室があり、両院の背後にはそれぞれ1階に閲覧兼座談室、2階に会議室がある。

また、議場の側面には議長室、秘書室、大臣室、クロークがあり、同2階の桟敷には中央に玉座、隣接して官員と外交官の席、そして人民席と記者席が配される。

玄関ホールの奥に二股の階段が見える。それは踊場でひとつになり、さらに奥に直進して左右に分かれる大階段室となり、2階の天皇陛下御室へと至る。

他方、外観は2階に達する2本一組のコリント式の円柱あるいはピラスターによって分節され、間口約180mの堂々としたネオバロック様式で仕上げられている（図3）。

図2 国会議事堂原案・平面図（上1階・下2階）

①玄関ホール ②ホール ③上院 ④下院 ⑤食堂・喫茶室 ⑥閲覧兼座談室
⑦議長室 ⑧天皇陛下御室 ⑨会議室 ⑩玉座

図3 国会議事堂原案・外観

II. 国会議事堂第2案（和洋折衷式）と仮議事堂第1案

この西洋式の原案の次に和洋折衷案（図4）が作成される。当初想定していた外壁用の切石の調達に疑問視されたこと、日本在住の欧米人がわが国の伝統建築との調和を訴えたことが設計案変更につながったとされる¹⁰⁾。担当は同じくパウル・ケーラーであった。

この和洋折衷式の設計時期については、エンデ帰国後の1887年8月以降となろう。傍証を挙げれば、同じ所員のエドガー・ギーゼンブルクが担当した司法省庁舎の和洋折衷案が1887年10月頃から翌1888年1月頃に作られている¹¹⁾。

国会議事堂第2案の構造は煉瓦造に切石仕上げとするが、両院には大きな入母屋屋根が架かり、中央玄関に唐破風が付き、その上に

は千鳥破風等で飾られた塔が立ち上がっている。原案と比べると、規模は同じで、オーダー柱は影を潜めたものの軒から下の構成は酷似しているので、第2案の平面計画に変更はなかったと思われる。

ところで、この国会議事堂と洋折衷案と並行して、すでに1887年9月下旬に仮議事堂の設計が開始されている。仮議事堂の最初の案は、「日本の国会仮議事堂案」(Skizze zu einem provisorischen Parlamentsgebäude für Japan)と記載された外観図面(図5)で、そこには「設計エンデ&ベックマン、P. ケーラー、ベルリン、1887年9月23日」という書き込みがある¹²⁾。その平面図は知られていないが、ドイツ側資料に「国会仮議事堂は同じ平面に倣いながらも、規模を縮小した」¹³⁾という記述がある。構造は木造に代わり、中央に登えていた塔はなくなり、規模は間口で約140mに縮小されている。

パウル・ケーラーと仮議事堂との関わりはここまでで、以後の設計はエンデ&ベックマン建築事務所の所員アドルフ・シュテークミュラー¹⁴⁾と臨時建築局技師吉井茂則(1857~1930)に引き継がれる。最初から議事堂の担当であったケーラーが来日しなかったのは、計報記事で紹介したように(1888年2月に死去)、すでにエンデの来日時には健康を害していたからだと推察される。アルコで死去したことは、南チロールでの静養を物語っている。

図4 国会議事堂・和洋折衷案

図5 国会仮議事堂第1案

Ⅲ. アドルフ・シュテークミュラー

藤森照信博士の研究によれば、仮議事堂の設計監理に当たったシュテークミュラーは、1887年5月4日にエンデとともに来日し、1890年10月25日頃に解雇されたとされ、同年10月21日に帰国したという大熊喜邦の記録を併せて紹介している¹⁵⁾。

帰国の時期については、東京日日新聞が1890年11月12日付で、「帝国議事院建築を担当計画せし、御雇い独逸人ステヒミール氏は今度辞職し、昨日午前の新橋汽車にて帰国の途に就きたり。よって同建築技手及び知人建築掛りの諸氏は、新橋停車場まで見送ったり」¹⁶⁾と報じているので、大熊の記録より3週間ほど長く滞在していたことになる。

以下、シュテークミュラーと仮議事堂との関わりを報じた新聞記事を紹介しておく。

「貴族院の玉座は、目下建築局御雇い独逸人ステヒミール氏が担任し、去る十三日宮内省へ出頭して、親しく玉座の模様を拝観したる由(略)」¹⁷⁾

「仮国会議事堂は同局雇独逸人ステヒミール氏工事を担任し其建築は総体木造りにて和洋折衷の所もあれど重にも日本風を用い議場は上院下院各々三百五十人の席を設くべき結構にて、初め獨逸国より送り来りし同堂の元図には三百人宛なりしを更に内閣よりの沙汰にて五十人を追加せしなりと総じて近く廿三年の開設までに間に合はする至急の建物なれば裝飾なども余程省略し其他とも初め一旦定めたる図面よりは一層簡略になす筈にて(略)仮議事堂は建築の時限短くして一々遠国の指揮を受け難ければ此等の指揮者なくステヒミール氏一人にて一切を計画するなりという(略)」¹⁸⁾

他方ドイツ側に、アドルフ・シュテークミュラーの経歴ならびに業績を特定できる資料は皆無に近い。確実に言えるのは、兄弟に建築家のパウル・シュテークミュラー(1850~1891)がいて、パウルはヘルマン・エンデの娘と結婚していることである¹⁹⁾。アドルフとエンデは姻戚関係にあったことになる。

シュテークミュラーという姓だけを頼りにすれば、その名をベルリン動物園の諸施設の設計者の中に見出すことが出来る。1898年から1908年の間に、シュテークミュラーは、鹿舎、雉舎、鶏舎などの諸施設を設計している²⁰⁾。

ベルリン動物園とエンデ&ベックマンとの関係は深く、同建築事務所は1870年代に多くの動物舎を建てている²¹⁾。とくにベックマンは1893年に同動物園協会理事、1897年から会長職に就いていることは特筆できよう²²⁾。兄弟のパウルは1891年に死去していることから、ベルリン動物園の諸施設の設計はアドルフであった可能性がある。もともとこれは推測の域を出ない。なお、これら諸施設のうち鶏舎(1908年)が現存している。

Ⅳ. 仮議事堂第2案(実施原図)と同変更案

今回発見された図面は「國會假議事堂階上之圖」と「國會假議事堂階下之圖」という記載のある1階と2階の平面図2枚で、縦約40cm、横約70cmのトレーシングクロスに縮尺200分の1で描かれている(図6)。

1、2階とも日本語で部屋名称が記入され、1階のすべての部屋に尺で寸法が入り、図面脇に坪数の記載がある(1階は1065坪7合2勺7支、2階は934坪8合4勺1支)。例えば、両院議場の大きさは内法寸法で、梁間方向で52尺5寸(最大64尺)、桁行は81尺5寸と記入されている。壁厚は、一部の間仕切りで5寸、それ以外は1尺である。

建物は中央部を台形状に突出させ、両翼部を大きく張り出させたEの字型平面をもつ。中央に車寄のある玄関、両翼部脇に議員用の入口を設ける。その中央玄関を入ると、8角形平面を持つ吹き抜けのホールとなる。同ホールの奥には二股に分かれた階段が設置され、その階段室の下を抜けると1階奥に食堂と談話室がある。階段を上がり中央の踊場で折れてさらに直進すると、2階奥の天皇陛下御室、大臣室等に至る。

中央ホールの左右に議員次室が付き、その後方に中庭を設ける。

図6 国会仮議事堂第2案（実施原図：上1階・下2階）

①上院議場 ②下院議場 ③食堂 ④談話室 ⑤整膳室
⑥議員次室 ⑦書籍室 ⑧会議室 ⑨大臣室 ⑩筆者室

⑪議長室 ⑫整衣室 ⑬天皇陛下御室 ⑭大臣室 ⑮玉座
⑯官員傍聴席 ⑰人民傍聴席 ⑱新聞記者 ⑲大臣掌務室

この議員次室は平屋である。両翼部の右手に上院議場、左手に下院議場がそれぞれ配される。両院の周囲には大臣室、会議室、議長室、筆記者室、整衣室等の諸室が付く。また両院の2階には机敷が巡り、玉座、官員傍聴席、人民傍聴席、新聞記者席等の諸席に区分されている。

建物の間口方向は約110mで、ケーラーによる同第1案を大幅に縮小しているものの、八角形の玄関ホール、その左右のホールを経て両院議場に至る構成、玄関ホールの階段室の取り方、そして2階奥の天皇陛下御室の配置などに原案（図2）との類似性を見るこ

とができる。

ところで、1890年11月に竣工した仮議事堂の外観写真とこの原図を比べると、両者は同じでないことが分かる（図7）。とくに原図の中央玄関から左右に付く棟（議員次室）が平屋であるのに対して、竣工後の写真ではその箇所が2階建てになっている。また、中央玄関の屋根の形も異なる。したがって、発見された原図はその後さらに変更されたことになる。

この当たりの変更事情については、当時の新聞の記事と附録図面が解く鍵を与えてくれる。1889（明治22）年1月の「東京朝

日新聞」によれば、

「目下工事中なる同仮議院はかねて記す如く来る五月を以て全く落成の筈にて引き続き其工事を取急ぎ居ることなるがその構造の詳細は本日の本紙附録として添たる全図の如く木造の仮院ながら亦相応に広壯の建築の由（略）此全図は同院の現体を六百分の一に縮図せしものなれば未だ十分に其实を示し得ざる憾なしとせずと雖ども仔細に平面図に照して其模様を按検せば亦以て来廿三年を期して開設せらるる所の議会実態の如何なるやをも想い見るに足りなん」²³⁾とあり、平面図の略図（図8）、正面図（図9）、議場内部図等が別紙として紹介されている²⁴⁾。

図7 国会仮議事堂の外観写真

図8 東京朝日新聞掲載の仮議事堂の平面図略図（1階）

図9 東京朝日新聞掲載の仮議事堂の正面図

東京朝日新聞に掲載された平面図と原図（図6）を比べてみると、両者は同じ平面図であることがわかる。同紙に掲載された正面図に中央玄関の上に八角屋根が描かれている。仮議事堂第1案（図5）と比較すると、中央の大きな寄棟屋根はなく、両院議場上の入母屋根は切妻に変更され、尖塔状の飾りはなくなっている。ドイチェ・パウツァイトゥンクは、「アドルフ・シュテークミュラーの監督下、屋根の形態は著しく簡略化された」²⁵⁾と報じている。

仮議事堂は1888年6月21日に起工しているの、この東京朝日新聞の記事は着工後半の時点のものとなる。同記事により、発見された図面は仮議事堂の原図であり、途中で設計変更がなされたことが裏付けられる。

さらに、仮議事堂の工事の様子を伝える別の記事がある。それは1890年2月の「大阪公論」²⁶⁾で、1階と2階平面図（図10）、そして正面図（図11）が附録として付く。同図を見れば、原図の

中央ホールと両院を繋ぐ議員次室の前に総2階の棟が増築されていることがわかる。それに伴い、議員次室は廊下になっている。また、国会仮議事堂第2案（図6）では両院議場の2階にあった玉座がここでは1階の貴族院の議長室前に移動している（図10の○印）。

この大阪公論掲載の図面と竣工後の図面を比較すると、諸室の面積は同じであるが一部増築部分が見られる²⁷⁾。さらに、同紙の正面図は、その増築棟の窓が縦長であるのに対して完成後のそれは横長であること、また中央に塔が聳えていることから、1890年1月24日の竣工までになお曲折があったことになる。

図10 大阪公論掲載の仮議事堂の1階平面図

図11 大阪公論掲載の仮議事堂の正面図

結論

わが国の国会議事堂については、エンデ&バックマン建築事務所による西洋式の原案、和洋折衷案、仮議事堂第1案、同第2案、そしてその変更案までさまざまな設計の変遷があったことが確認できた。以下、仮議事堂建設までの過程を年代順にまとめてみよう。

- ・1886年4月24日 ベックマン来日
- ・1886年7月2日 ベックマン離日、帰国後(8月)、国会議事堂原案作成(担当:ケーラー)
- ・1887年5月4日 エンデとシュテークミュラー来日。国会議事堂原案持参。
- ・1887年7月19日 エンデ離日。帰国後(8月)、国会議事堂和洋折衷案作成(担当:ケーラー)
- ・1887年9月頃 国会仮議事堂第1案作成(担当:ケーラー)
- ・1887年10月頃-翌1888年6月頃 国会仮議事堂第2案(実施原図)作成(担当:シュテークミュラー、吉井茂則)
- ・1888年6月21日 国会仮議事堂の工事着工
- ・1890年11月11日 シュテークミュラー離日
- ・1890年11月24日 国会仮議事堂の竣工

今回発見された平面図(図6)は工事中に変更が加えられたとはいえ、仮議事堂の実施原図であった。また、東京朝日新聞掲載の正面図(図9)により、創建当初に考えられていた仮議事堂の姿が明らかになった。

エンデ&ベックマン建築事務所の原案(図2)と仮議事堂実施原図とを比較すると、確かに仮議事堂の規模は縮小されているものの平面計画に多くの類似性が認められ、その大枠は継承されていたことがわかる。仮議事堂はアドルフ・シュテークミュラーと吉井茂則によって完成したが、今回発見された原図は、議事堂の竣工を見届けることなく計画途上で亡くなったパウル・ケーラーの設計理念が生き続けていたことも明らかにしてくれる。

今後は、未だ解明されていない仮議事堂の構法について別稿にて研究発表を行う予定である。

なお、本研究は平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(c):課題番号17560579)による研究成果の一部である。

註

- 1) 本論文は、日本建築学会関東支部研究報告集で発表した次の論文の内容に新たな知見を加えたものである。堀内正昭:「国会仮議事堂案と建設までの図面の変遷史」, 2004年度日本建築学会関東支部研究報告集, pp.633-636.
- 2) 大熊喜邦:「議事堂建築の概要」, 『建築雑誌』第51輯第623号, 1937.2, p.198 これは大熊(当時大蔵省営繕管財局工務部長)が昭和11年12月9日に建築学会で行った講演録である。ただし、引用に際して旧字体を新字体に改めている。
- 3) 国会仮議事堂の図面は2004年3月千葉県内の古物市場で出され、東京の古書店が購入した。筆者はその鑑定に当り、図面は昭和女子大学が所蔵する。「朝日新聞夕刊」(2004年6月12日付)に当該記事。
- 4) 参照。藤森照信:「エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究 その4 建築各論」, 日本建築学会論文報告集 第280号, 1979.6, pp.179-190。堀内正昭:『明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン』(井上書房, 1989) pp.240-244, 293-308.
- 5) 大熊喜邦:前掲書, p.198 引用に際して旧字体を新字体に改めている。
- 6) Todtenschau, in: *Deutsche Bauzeitung*, p.72 (1888年2月12日付)
- 7) 参照。Meyers Lexikon, Bibliographisches Institut, Leipzig, 1924, p.812
- 8) Erweiterung der Architektenfirma Ende & Böckmann, in: *Deutsche Bauzeitung*, p.140 (1886年3月20日付)
- 9) ドイチェス・ハウス協会会館については次の文献を参照。Preisbewerbung für Entwürfe zu einem Deutschen Haus in Brünn, in: *Deutsche*

- Bauzeitung*, p.200, 1887. Entwürfe zu einem Gesellschaftshaus für den Verein Deutsches Haus in Brünn, in: *Deutsche Bauzeitung*, 1888, pp.103-106 Das deutsche Haus in Brünn, in: *Deutsche Bauzeitung*, 1891, pp.356-358
- 10) 参照。Deutsche Entwürfe für japanische Monumental-Bauten. I., in: *Deutsche Bauzeitung*, 1891, pp.121-122.
- 11) 堀内正昭:「エドガー・ギーゼンベルクの経歴と旧司法省庁舎(現法務省本館)の設計に果たした役割」, 日本建築学会計画系論文集 第568号, 2003.6, pp.147-152
- 12) 同図面については、大熊喜邦による原図の模写図面が日本建築学会図書館に所蔵されている。ここでは *Deutsche Bauzeitung*, 1891 に掲載された図を参照。
- 13) Deutsche Entwürfe für japanische Monumental-Bauten. I., in: *Deutsche Bauzeitung*, op.cit., p.122
- 14) Adolf Stegmüller (生没年不詳) これまでステヒミュレル、ステヒミュラーなどと発音されてきたが、本稿ではドイツ語発音表記にしたがって、シュテークミュラーとする。参照。Duden Band 6 *Das Aussprachewörterbuch*, Dudenverlag, Mannheim, 1974.
- 15) 藤森照信:「エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究 その5 建築家及び技術者各論」, 日本建築学会論文報告集 第281号, 1979.7, p.175
- 16) 東京日日新聞の「建築家ステヒミールが帰国」と題する記事から。参照:『明治ニュース事典第三巻』, 株式会社毎日コミュニケーションズ, 1984, p.226
- 17) 東京日日新聞の「ペンキの塗り方は欧風、玉座は石膏装飾」と題する記事から(1888年1月18日付)。参照:『明治ニュース事典第三巻』(前掲書), pp.225-226
- 18) 毎日新聞の「現今の大仕事」と題する記事から(1888年1月24日付)。引用に際して旧字体を新字体に改めている。
- 19) 参照。Kieling, Uwe: *Berliner Privataarchitekten und Eisenbahnbaumeister im 19. Jahrhundert*, Biographisches Lexikon, Berlin, 1988, p.67
- 20) 参照。Heinz Georg Kloes, Ursula(eds.): *Der Berliner Zoo im Spiegel seiner Bauten 1841-1989*, Berlin, 1990。本書の388頁にシュテークミュラーの名で設計された施設が計35件列挙されている。
- 21) エンデ&ベックマンは1870年代に、熊舎、猛獣舎、アンティロープ舎、象舎を設計し、そのうちアンティロープ舎(1871-72)が現存している。参照。堀内正昭:『明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン』(前掲書), pp.159-166.
- 22) 堀内正昭:『明治のお雇い建築家エンデ&ベックマン』(前掲書), pp.88-89.
- 23) 東京朝日新聞の「帝国議会仮議院」と題する記事から(1889年1月3日付)。参照。『朝日新聞<復刻版>明治編③』(明治22年1月~3月), 日本図書センター, 1992 引用に際して旧字体を新字体に改めている。
- 24) 『朝日新聞<復刻版>明治編③』(前掲書)には附録図面はない。同図面は昭和女子大学所蔵のものを参照。
- 25) Deutsche Entwürfe für japanische Monumental-Bauten. I., in: *Deutsche Bauzeitung*, op.cit., p.122
- 26) 大阪公論(1890年2月13日付)は東京大学明治新聞雑誌文庫に収められているが、その記事は「本日は予告の如く帝国議会議事堂の全図併に其内部に於ける細図附録一葉を添へたり」と記すだけであり、また附録図面は失われていた。同図面は衆議院事務局憲政記念館所蔵のものを参照。
- 27) 大阪公論掲載の図面と竣工後の図面の違いは、建物側面奥に「議員警察」と「土間」、建物背後に「小使部屋」が増築されていることである。

図版出典:

- 図1, 2, 3 Technische Universität Berlin Plansammlung
 図4, 5 *Deutsche Bauzeitung*, 1891/図6, 8, 9 昭和女子大学図書館
 図7 日本建築学会図書館/図10, 11 衆議院事務局憲政記念館

(2005年12月9日原稿受理, 2006年2月11日採用決定)